

海士有木の汽笛

あまありき

千葉県千葉市 小林 朔

小湊鐵道の沿線に、海士有木という駅がある。五井駅から二駅の無人駅で、辺りには田んぼが広がっている。その海士有木駅のすぐ近くに、祖父母の家がある。我が家では毎年の元日にこの祖父母の家でご飯を食べるのが通例で、今年も例外ではなかった。

その日の朝、私は母親の運転する車に揺られていた。千葉市の自宅から祖父母宅までは、約一時間。私は大晦日の夜更かしのせいで気だるい身体を、シートにぐたつと預けていた。気だるいのはなにも身体だけではなかった。祖父母の家を訪ねることは年に何回かあったが、なかでもこの正月の親戚の集まりというのがなんだか苦手だった。親戚といっても、集まるのは私の家族と祖母、そして叔父の家族だけではある。全く知らない人と一緒に過ごすわけではないが、やはり、なにか苦手だった。うまく言葉にできないが、「萎縮する」というのが近いかもしれない。

そうしてぼうつとするうちに、海士有木に着いていた。車を降り、家のドアを開けると祖母が出迎えてくれた。この家を訪れたとき、祖父母の第一声は決まって私と、私の兄弟の身長伸びが加減についてだった。この日もまたそうだった。祖父母の家の一階には大まかにリビングと和室がある。荷物を置くために和室へ入ると、今年ちょうど小学生になったところがいた。話には聞いて

いたが、実際見てみると、あの赤ちゃんがもう小学生なのか、と衝撃を受けた。あれからもう、七年。私にはいそこが一人しかないもので、そんな体験も初めてで、祖父母が毎回身長を気にかけるのもこういう理由なのかと初めて理解できた。

荷物を置いた後、私はリビングに向かった。この部屋には食事に使うテーブルと、テレビの前の炬燵こたつがあり、その二つで空間が分かれているような配置になっている。テーブルでは祖父母と母親が話をしていたので、私は炬燵でひとり携帯を見ていた。結局、やっていることは自宅と変わらないのだ。学校の課題を持ってきたものの、ここでやる気にもならなかった。時間を潰していると、聞こえなくとも耳にはテーブルの方から話し声が入ってくる。職場の愚痴や芸能人の顔にとにかく言う声が聞こえてくる。そう言う話を聞いていると、ああ、分かり合えない、と思う。愚痴くらい、誰でも言うものではあるかも知れないが、こうして離れた場所から聞いていると、どうしてもそういう考えになっていく。そんなふうに、この空間は私の心を硬化させていくのだった。

だからだと過ごすうちに、夕方になっていく。さすがに携帯を見るのにも飽きてきて、私はひとつ、散歩に出てみることにした。海士有木駅がすぐ近くなので、どうせなら小湊鐵道に乗ってみようとも思い立った。そうして上総山田かざさやまだまでの二駅だけ列車に乗って行き、帰りはゆっくり歩いて帰ることにした。最初は一人で行くつもりだったが、叔父も一緒にいくという話になった。

二駅だけ列車に乗ると言うのも少し変な話かもしれないが、これには一つ理由がある。数年前、確か中学二年生の時の話だ。私

は小湊鐵道を使って、一人で自宅から祖父母の家に行ったことがあった。当時は列車に乗る機会もほとんどなく、私は小さな旅行をするような気分だった。なにより、五井駅で乗り換えてからのあの列車の独特の雰囲気が強印象に残っていた。あの日も夕方、沈んでいく夕日を眺めていたことを覚えている。

話を戻して、駅に着いた私と叔父は、無人券売機で切符を手に入れた。駅のすぐ横には私の生まれた病院があったが、すでに閉院しているようで建物だけが残っていた。私は列車を待つ間、駅舎やホームの写真を撮っていた。古ぼけた標識や電柱が新鮮に映った。やがてあの特徴的な赤色の列車がやって来た。

夕日に照らされた列車の中にはノスタルジーが溢れていた。電灯は節電のためかまばらで、少し薄暗い。田園と鉄塔、扇風機、席に座る人々の顔、すべてに茜がさして、「終わり」のイメージを想起させた。車窓には田園風景が流れていく。このまま乗り続けていたら黄泉の国まで連れていかれてしまいそうな感じだった。私が車窓に見入っている一方で、叔父はといえば少し離れたところで同じように景色を見ていた。

叔父について話そう。叔父とは、特に仲がいいわけでもなく、悪いわけでもなかった。神奈川に住んでいて会う機会が少ないので、何をしているのかもよく知らない。ひとつ語るべきことを挙げるなら、叔父は昔から―たぶん私が産まれる前から―ずっとフォルクスワーゲンの車に乗っていた。だから、私と私の兄弟は叔父のことを「ワーゲンのおじさん」と呼んでいた。叔父は一人しかないなので区別する必要もないが、ずっとそういう呼び方

だった。

電車から降りた後は二人きりで何も無い田舎道を歩いていった訳だが、叔父は何をするでもなく、ただ私と一緒に歩くだけだった。叔父が私に着いていくと言った時も、特に目的地がある訳でもないけれどもいいのか、と聞いた。叔父がいいと言うので、私は気ままに道を決めて歩いた。地図を見ると、駅の近くに養老川が流れている。私も聞いたことがある川の名前だった。川沿いには公園もあり、面白そうだと思って川に沿って歩いていくことにした。人気のない道に二人の影が伸びていた。

歩きながら叔父とぼつぼつと話しているうちに、自然と音楽が二人の共通項だということがわかったので、その話ばかりしていた。けれどジェネレーションギャップというやつか、叔父の言うバンドにあまり聞き馴染みがなかった。また叔父は洋楽が好きだと言うが、私は洋楽にあまり明るくなかった。話が通じたのはオアシスくらいだった。叔父は夏にあった東京ドームの来日公演に行ったらしい。私も携帯で今回のツアーの動画をよく見ていた。ライブに行っている叔父を想像すると、急に叔父が人間じみて見えて来た。

二駅の間を歩くのには、一時間弱かかる。家を出る時間が遅かったので、列車を降りて歩いているとすぐに真っ暗になった。もう少し明るければ景色を楽しんだりできたが、街灯のない夜は本当に真っ暗だった。写真も露光不足で撮れなくなっていた。これほど暗いなら、叔父がついて行くと行った理由にも納得できた。そういうえば、前に列車で海士有木まで来た時も、駅まで迎えに来

てくれたのは叔父だったなと思ひ出した。

しかし歩く距離が長いもので、話題が尽きるのはそう遅くなかった。私自身は見知った相手ならば沈黙がそこまで苦では無い性格だが、相手が沈黙を気にするかどうかと言うことだけは気になる。その点私は最初こそ心配をしたが、元々叔父が無口なこともあって段々気にならなくなった。叔父にはそういう距離のある優しさがあつた。沈黙の後に突然口を開いて会話を始めることも自然だった。街灯ひとつない養老川沿いを、遠くの街の明かりを頼りに歩いていった。途中で観光案内の看板に足を止めたり、やけに明るい星を見つたりした。途中、向こうに井戸があるから行ってみようと叔父に言われた。叔父は私に着いてくるばかりだったので提案を受けることに少し驚いたが、行ってみることにした。実際そこにはぼつんと井戸があつた。叔父は、昔は私の母とよくこの井戸で遊んだものだと言う。私は母と叔父の兄妹らしいエピソードを初めて聞いた気がした。私もいつか、親戚の子供にこんな話をするのだろうか。そんな自分はまだよくイメージできなかつた。そのうち祖父母の家に着いた。

帰るとすぐに夕食だった。祖父はとにかく私に食べ物を与えた。いつだか私がサーモンが好きだと言うと、毎回食卓にサーモンが出るようになった。そしてやはり、大学受験に向けて頑張りなさいという話をした。そんなことはわかっている、という言葉は飲み込んだ。それに対して、帰ってから叔父と話すことはなかった。たらふく食べたあとで、祖父と叔父からお年玉をもらった。叔父はそれに加えて図書カードを私にくれた。祖父とは違う、間

接的な応援の仕方だった。私はそれで参考書を買うことにした。ほどなくして別れの時間になった。

帰りの車は冷えていた。家族の準備を待つ間に、私は今年最初の一日を振り返った。叔父は確かに優しいが、どこか心の壁があるような気がした。腹は満たしたが、どこか寂しい気がした。それが良いことなのか悪いことなのか、私にはまだわからない。家の前の道路まで祖父母や叔父が見送りに来てくれたので、窓を開けて挨拶をする。また来なさいと祖母が言う。不意に、小湊鐵道の汽笛が遠くから響いた。広い夜の空を、低く長い音が震わせた。私には見えない場所で、列車は誰かを運んでいく。いとこは字が書けるようになり、祖父母の背は少しずつ低くなる。叔父は相変わらずワーゲンに乗るが、父親として生きるうちに何かが変わっているのかもしれない。車のアクセルが踏まれて、祖父母の家が小さくなる。道の灯りが増えていく。私の頭には、汽笛の音がずっと響いていた。